

殿様日記 vol.13 「お香の祭典」～日本古来のかほりを聞く～

令和2年 正月

昨年の令和元年、天皇陛下御即位記念、第34回国民文化祭・にいがた2019及び第19回全国障害者芸術・文化祭にいがた大会が新潟県下で開催され、私は



「お香の祭典」会場

10月26日新潟市白山公園内の
^{えんきかん}燕喜館で開催された「お香の祭典」に出席した。主催は(公財)お香の会で、事務局は奈良市薬師寺内にある。

今回は元伯爵家の香道御家流
23代三條西 ^{ぎょうすい}堯水様のお招きであつた。三條西家とは様々な御縁があり、明治期の19代三條西

^{きんあえ}公允様は新潟県知事でもある。堯水様とは(一社)霞会館の会員同士であり、私が伝統文化委員会の委員であつた時に「香道に親しむ会」のお手伝いをさせて頂いたこともあつた。また、平成30年、長岡開府400年記念事業としてアオーレ長岡で「日本古来のかほり香道に親しむ雅な一日」を開催した折にはお家元自らこの会にご出席頂き、丁寧に解説ご教授を頂いたこともあつた。



長岡藩主第九代牧野忠精公画 香席の雨龍達
(長岡市立中央図書館所蔵)

香道は江戸時代大名家で教養の一つとなつていたと思われる。

長岡藩主第九代牧野 ^{ただきよ}忠精公は得意の ^{あまりょう}雨龍を用いて香席の場面を描いている。これは忠精公の描いた「雨龍横巻十三態画」の一部分で、桃色、青、緑などの美しい色彩が施されている。香道の専門家によれば、実際に香道の心得が

なければこのように正確に描けないとのことである。

昨年の燕喜館でのお香席は50名ほど入れる広いお座敷で、しんと静まり返った空気のなか開始となった。その日のご趣向は新潟県での開催にちなみ、お題は「越の海香」であった。

証歌は、「いにしへに かはらぬものは 有磯海と むかひに見ゆる 佐渡の島なり」の良寛和尚の歌であった。

こころみこう
試香は有磯海と佐渡の島の2種類のお香が回ってきた。その後「本香炊き始めます」のお香元こうもとの言葉で、試香2種とまだ聞いたことのない1種の合わせて3種類のうち、香名のわからない2種類のお香が回ってくる。お席の皆様はそれぞれ回ってくるお香を静かに聞き分け、日常では経験できないひと時を堪能されている。大勢の方のもとにお香が回っていくと、少しずつではあるが広いお座敷に徐々に香りが立ち込め、何とも言えない幽玄の世界に満たされていく。

最後に「お香満ちました」とのお香元の言葉でお香席は閉じられた。

その後、正解のお香名の順番と



香席のようす



お香のお道具



菊紅葉蒔絵香棚（江戸時代）

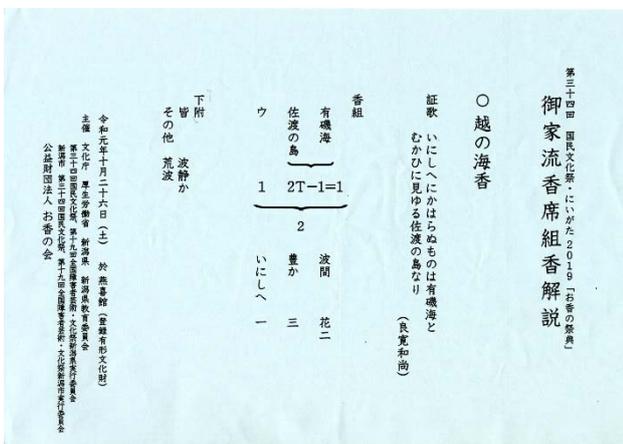
参加者の成績が発表され、正解者が続出していた。私自身の成績はともかく、座を同じくした方々とお香を楽しみ、普段経験することができない時間と空間を持てたことは大変素晴らしく、緊張感を伴う楽しいひと時であった。

控室では、奈良東大寺長老筒井寛昭様とご息子にお目に掛かってご挨拶をし、私の従兄にあたる元東大寺貫主を務め現在は中性院住職の北河原様のお話などをさせて頂くことが出来たのもうれしいことであった。

長岡では長岡開府400年を記念して実施した「日本古来のかほり香道に親しむ雅な一日」を継承する形で、香道に親しむ会を立ち上げ、長岡市内で香道教室を開催している。長岡の方が、皆様お香を知っていると見えるようになれば良いと思っている。



香木を削る道具類



当日の御家流香席組香解説



燕喜館にて

右側 川村千春先生（柏友会会員）